

安堵の初優勝

日本一後に九州一に

通算1アンダー 143

63歳の榎 隆則（大分中央）



【写真は北山CCのキャディーさんたちに祝福される榎】

本音がにじむ。「やっと九州のタイトルが取れましたね。優勝カップは重かった。ホッとしたという感じですかね」。63歳にして「九州」がつく初のタイトル。2016年に九州より先に日本シニアを制した。順番が逆になったわけである。榎本人は「勝てなくても余り気にしていなかった。周りからは冷やかされるし、みんなに『もっとリスペクトしろよ』なんて言っていました」と笑ったが、日本一の称号はそれなりの重さがあったと推察される。

九州チャンピオンへの道は平坦ではなかった。初日、出場128選手中、ただ一人アンダーパーの70をマーク。幸先のいいスタートを切ったが、最終日、特に前半のアウトは辛いゴルフとなった。2、5番でボギーを叩いてノーバーディー。同じ組の田中雅之（若木）が1、2、6番とバーディーを奪って、ノーボギー。スタート前は田中を2打リードしていたのが、折り返した時点で逆に3打の差をつけられた。田中には勢いもあった。それでも「何があるか分からない。あせりはなかった」と榎が後半に入るとしぶとさを発揮する。10番は2人ともバーディー。続く11番で榎が2mのバーディーパットを沈めると、田中は痛恨のダブルボギー。この1ホールで2人は並んだ。その後、スコアを落とした田中に対し、榎は残り7ホールを1ボギーでしのいだ。



日本シニアで優勝した時は57歳。それから6年の歳月が流れた。「あの頃よりドライバーの飛距離が10~20ヤードは落ちている。3~4日続けてゴルフをすると腕も疲れる。ちょっと恥ずかしいけど」と言いながらも、それを補う武器も身にまとう。ショートゲームが円熟の境地に入ったのだ。「練習と距離計のお陰」。ピンまで40~60ヤードの距離をややアバウトに打っていたのを、キチンと正確にアプローチし始めて、スコアがよりまとまるようになった。少々ショットの調子が悪くなくてもショートゲームの強さが粘りとして表れた。

大分市に本社がある半導体製造装置メーカーのエスティケイ（STK）テクノロジー社が運営するゴルフ練習場の支配人。ゴルフは社会人になった23歳から始めた。「目標を1つ達成したし、また、日本シニアも取りたいね」。静かで穏やかなムードの持ち主だが、秘めた思いは強い。

《通算1オーバーで2位の大倉清(浮羽)》

2005年の九州オープンをアマチュアで制した、今大会初出場の61歳の大倉清(浮羽)が通算1オーバー145で2位に食い込んだ。初日は2オーバー74で6位タイだったが、最終日は1バーディー、ノーボギーの71で回った。「初出場だし、優勝せんといかんなあ。久しぶりのノーボギー。いいゴルフをしたのになあ」とちょっとだけ悔しさを見せながらも、「ゴルフをせんすぎ。体が回らんし、ドライバーが芯に当たらん」と話していた。

